

実践の中で人間を徹底して尊重する心理学をめざして

日本応用心理学会第77回大会特集

～特集にあたって～ 日本応用心理学会機関誌編集委員会

「応用心理学研究」誌に学会大会の大会委員会企画シンポジウムおよびワークショップの内容を「大会特集」として紹介する。今号では、2010年秋に開催された第77回大会での大会企画シンポジウムと体験型ワークショップを取り上げる。「大会発表論文集」に掲載された各シンポジスト・話題提供者・指定討論者の発表論文をもとに、大会委員会より寄稿を受けて編集を行った。

◇日本応用心理学会第77回大会（京都大会）の概要

大会委員長 田中真介（京都大学）

2010年9月11日（土）～12日（日）に日本応用心理学会第77回大会が京都大学で開催された。

国際連合は、2001年から2010年までを「世界の子どもたちのために平和の文化を提供し、非暴力を実現していくための国際10年」と提起した。この課題提起を受けとめて、大会委員会は大会のテーマを『実践の中で人間を徹底して尊重する心理学をめざして』と提起し、①大会記念企画資料展と記念シンポジウム1件のほか、②大会企画8件（海外招待講演1、シンポジウム3、特別シンポジウム1、体験型ワークショップ3）、及び映画上映会（フィルム・フェスティバル）を開催した。

本号ではそれらの概要を紹介し、それぞれのシンポ・企画について、基調報告論文（大会論文集をもとに改稿されたもの）、指定討論者の問題提起と討論のまとめ、及び参考論文・資料・文献リストを収録する。

1. 大会記念企画および大会記念講演

■大会記念企画資料展：「発達保障思想の原点と展望 —糸賀一雄のラストメッセージ「この子らを世の光に」—

戦後のわが国の社会保障・発達権保障の礎を築いた糸賀一雄の資料展。特に1930年代の学生時代から1960年代に近江学園で活躍した時期の糸賀一雄を中心とする近江学園グループの療育実践、そして現在の最先端の療育・発達研究に通じる重要資料を展示した。

■大会記念企画シンポジウム：「発達保障論の成り立ち・現在・展望 —近江学園における実践と研究の系譜から—

糸賀が設立し園長を務めた滋賀県立近江学園での療育実践研究と発達研究の取り組みと成果をもとに、すべての子どもたちの発達を尊重し保障する思想と理論の成立過程と現状が紹介され、今後の展望について討議した。高谷清氏より「糸賀一雄の魂と思想」、加藤直樹氏より「庇護授産所（シェルタード・ワークショップ）の構想をめぐる」、森本創氏より「近江学園の現状と課題 —入所児童の変化の中で近江学園として大切にしたいもの—」と題して基調報告を受けた。

■大会記念講演：「デジタルペンを用いた描画過程の自動分析 —発達診断への応用可能性について—

フランスの発達心理学者フィリップ・ワロン氏を招聘し、デジタルペンを用いた描画分析の最新の研究成果についての講演をいただいた。完成された絵だけを評価の対象とするのではなく、子どもの心のダイナミックな描画過程を読み取ることによって、子どもたちの心の内面に迫り、子どもたちの発達をより深く理解できることが示された。

2. 大会企画シンポジウム

大会テーマである「実践の場での人間の尊重」と対極にある社会的な諸問題を取り上げ、基礎資料・研究例の紹介と問題提起を受けてフロアの参加者とともに討議した。特に、医療問題の典型例として「京都・島根ジフテリア予防接種被害事件」、臨床実践の最先端の取り組みとして「小児科および精神科医療の臨床」、乳幼児とその家族を対象とする発達相談・臨床相談実践として「発達診断の役割と可能性」を取り上げた。また、「9.11同時多発テロ事件」に焦点をあてて、人間尊重の社会的・政治的・歴史的な前提を考え、平和を構築していくために心理学はどのような意義と役割を担っているのかについて討議した。

■シンポジウム1:「予防接種被害と心理学の役割 —京都・島根ジフテリア予防接種被害事件の検証—」

1948年に京都と島根で「ジフテリア予防接種被害事件」が発生した。世界史上もっとも多数の死者・被害者を出した予防接種事故である。本事件に関する新たな歴史資料が発掘され、当時の日本政府とアメリカ政府の医療政策の闇が浮き彫りにされた。新資料をもとに、ワクチン被害を受けた子どもたちや家族にどのような心理学的・医学的・社会制度的な支援が必要かについて討議した。本研究には2009年3月に「ノーモア薬害ヤコブ人権賞」が授与された。

■シンポジウム2:「臨床の場で大切にしたいこと —小児科医療と精神科医療の臨床実践から—」

小児科・精神科の医師や教育・療育の専門家は、相手とともにある時間と空間のなかで、どのように対象と関係結び、相手を助けているのだろうか。①子ども理解・人間理解の方法、②診断と治療・臨床相談活動で最も大切にしていること、③病気・障害の持つ意味の発見による医療・臨床相談の新展開、これらの観点について小児医療と成人の精神科医療の臨床医に報告を受けた。1) 小児科医療では、重度障害のある乳幼児たちの臨床の場で、子どもたちの声なき声を読み取る医療と保育・療育のあり方、そして、家族と地域を支える臨床活動について。2) 精神科医療では、多種多様な精神疾患の臨床場面で、「出会い」「臨床の場」「治療的な関係」「メッセージとしての病い」「回復とは何か」などの観点について話題提供を受けた。

■シンポジウム3:「発達診断の役割と可能性 —発達診断技術の検討をふまえて—」

人間の発達過程には、人間として共通する発達の道筋がある。発達診断とは、その道筋を踏まえて、子どもたち一人ひとりの発達の水準と特質を明確に把握するとともに、子どもたちの内なる発達要求をとらえ、保育・教育・療育実践および子育て実践を支えていく営みといえよう。このシンポでは、発達診断の未来の役割と可能性について、①発達診断事例の報告をもとに、②障害の発見と育児支援、療育施設における早期対応と保護者支援、巡回相談、③小・中学校における学習支援と集団における友だち・役割づくり、学童保育における居場所・遊び・仲間づくり、家庭における家族関係づくり、④発達診断技術の構築における研究の視点と姿勢、⑤成人までの育ちの見通しを持った発達診断の役割、これらの観点について討議した。

■特別シンポジウム:「9.11の子どもたちへ —平和を創る新たな心理学を求めて—」

2001年9月11日にアメリカで発生した「同時多発テロ事件」(9.11事件)に関する基礎資料をもとに、国家による戦争行動を制御し、平和を構築していく際の課題について問題提起を受けた。経済史の基礎研究及び9.11事件の真相究明を求める立場から、①映像の心理的効果、②マスコミによる情報操作と世論・感情の誘導、③9.11事件後のアメリカでの「愛国者法」の制定とナチスドイツでの総動員法との密接な関連、④真相究明に対する心理的な障壁、これらの観点について応用心理学の課題と期待が提起された。それに応じて、心理学研究の立場からは、映像資料等を利用した情報操作によって世論がどのように作り出されていくかについての基礎研究が紹介され、心理学的知見に立脚したメディア・リテラシー教育の重要性が提起された。

3. 体験型ワークショップ

今大会のひとつの特色は、多彩な「体験型ワークショップ」を通じて、新しい時空間の中で新たな自己、新たな仲間との出会いを直接経験する機会が準備されたことだった。

企画1「プレイバックシアター」では、仲間とともに演じる演劇の力が、自らの心の痛みをどのようにして癒していくのか、一人ひとりの気持ちや願いをどのように受けとめ実現への扉を開いてくれるのかを体感しあい、交流を深めた。

企画2「みんなでつくる音の輪(和)」では、世界的な現代音楽作曲家である松尾祐孝氏を招いて、身近なものはどんなものでも楽器となつて、即興音楽を作つて楽しむことを体験した。そして、自分自身が楽器となり、音楽となり、いつでもどこでも誰とでもともに音楽を作つていけることを実感するとともに、自らが音楽の美しさそのものとなる貴重な瞬間を体感した。

企画3「人形劇を楽しむ」では、名古屋から楽しい「人形劇団もぐら」が参上。劇場と化した教室にはいつのまにか舞台が作られ、「だるまちゃんとかみなりちゃん」、そしてこの二人を温かく見守る「かみなりのお父さん」が登場した。参加者は劇団員の一人となつて「タオル人形」を実際につくつて「子どもたちが元気になる人形劇」を体験するとともに、上演のコツを学び、人形劇の世界を楽しんだ。

感動が自己を世界に位置づけ直し、感動が私たちの世界を新たにす。それは自らの内面的な魅力の新たな発見につながるるとともに、社会の中での新たな自分の位置の発見となり、それによって私たちは、まわりの世界を新たに認識する力を得ることができる。そしてさらに、そのような感動と発見は、未知のよりよい新しい社会をつくる力につながっていくだろう。

4. 映画上映会(フィルム・フェスティバル)「戦争と平和を考える映画会」

大会テーマおよび大会企画シンポジウムと関連の深い6本の映画を上映した。上映前に案内役の教員・シンポジストが解説を行い、上映後に自由討議を行った。上映作品と解説者は次のとおりであった。上映にあたっては、京都大学総合人間学部、大学院人間・環境学研究科の教員および同図書館『環 on 映画会』のスタッフの協力を得た。

- (1) 「夜明け前の子どもたち」：張 貞京(京都文教短期大学)
- (2) 「911の子どもたちへ」：西牟田祐二(京都大学)
- (3) 「夕凧の街 桜の国」：田中真介(京都大学)
- (4) 「砂の女」：ジャック・キルツェンブラット(オーストラリア・アルフレッド病院)
- (5) 「ゆきゆきて神軍」：岡 眞理(京都大学)
- (6) 「父と暮せば」：田中真介(京都大学)

5. 大会委員会の構成

田中真介(京都大学) 大会委員長

長崎純子(児童デイサービス和) 事務局長

来田宣幸(京都工芸繊維大学) 副事務局長・編集長

安藤史郎(児童デイサービス和) 企画・運営・会場

梅岡直子(洛西子ども支援センター) 運営・係員

岸本栄嗣(京都造形芸術大学) 企画・運営・会場

寺崎美穂(交野市・枚方市発達相談員) 企画・運営

麦谷綾子(NTT科学基礎研究所) 庶務・システム設計

本原琴美(おきなわ発達研究会) 庶務・ホームページ

棚橋彩香(京都大学大学院M2) 庶務・会計

横井川美佳(京都大学大学院M1) 庶務・運営

長田かおり(京都大学大学院M1) 庶務・運営

清水依子(京都大学大学院研究生) 庶務・運営

宮下芙美子(京都大学総合人間学部) ポスター

渡辺和香(京都大学事務局) 総務・財務・受付